令和6年度　全国学力・学習状況調査

ー取手市の児童生徒の学習状況についてー

取手市教育委員会 指導課

令和６年４月18日（木）に全国一斉に行われた、全国学力・学習状況調査の結果が公表されました。今回の結果をもとに、取手市立小中学校の児童生徒の学習状況を掲載します。

なお、この調査は学力の一部をはかるものであり、学力のすべてを示すものではありません。

【調査対象】

小学校6年生、中学校3年生

【調査内容】

①教科に関する調査
（国語、算数・数学）

②生活習慣や学習環境に関する調査
(質問紙)

国語

【小学校】
問題数　全１４問
【中学校】
問題数　全１５問

算数・数学

【小学校】算数
問題数　全１６問
【中学校】数学
問題数　全１６問

質問紙

【小学校】　６３項目
【中学校】　６５項目

取手市立小学校 国語の結果

成果がみられたところ

◎目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、伝え合う内容を検討する力　（話すこと・聞くこと）

◎目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討する力　（話すこと・聞くこと）

課題となったところ

▲学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う力　（言葉の特徴や使い方に関する事項）

例）きょうぎ→競技　　なげる→投げる

▲人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする力　（読むこと・選択）

▲登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉える力　（読むこと・記述）

今後の学校教育の中で

◇既習漢字を意識して使い、同音異義語や同訓異字を日常的に使い分けられるようにする。

・漢字の練習は作業的な練習になっていないだろうか？

→1文字につき5回書くなど機械的な練習だけでなく、漢字や熟語の成り立ちを調べたり、覚えた漢字で短文を作ったりする学習も加える。

→AIドリルの手書きの漢字練習機能を活用し、AIで出題された自身の間違いやすい漢字を中心に練習するなど、より効果が高い練習方法にシフトする。

→タブレット端末で変換候補に挙がった漢字に着目し、使い分けができるようにする。

◇児童がそれぞれの読み方で読めるよう配慮する。

・文章を読む観点を児童自身が焦点化しているだろうか？

→友達が着目したところと自分が着目したところを比べることを通して、児童自身が「人物像」「物語の全体像」「表現の効果」のどの観点で読んだのかを明確にして焦点化できるようにする。

・物語のよさを見つけることができているだろうか？

→次のように順を追って読み取りを行うことにより、読みを深められるようにする。

→どこからそう思ったのかを探す。

→場面ごとに、「何が、どのように変化したのか」を読む。

→思考そのものにかかわる語句（「なぜなら～からです。」等の文型）を例示し、「どうしてそのような表現したのか」を考えながら読む。

取手市立中学校 国語の結果

成果がみられたところ

◎具体と抽象など情報と情報との関係について理解する力
（情報の扱い方に関する事項）

◎目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にする力
（書くこと）

◎行書の特徴を理解する力
（我が国の言語文化に関する事項）

課題となったところ

▲目的に応じて必要な情報に着目して要約する力
（読むこと・記述）

▲文脈に即して漢字を正しく書く力
（言葉の特徴や使い方に関する事項）
例）みちたりた→満ち足りた

▲表現の効果を考えて描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫する力
（読むこと・記述）

今後の学校教育の中で

◇必要な情報に着目して要約する力を付ける。

・要約する力が身に付いているだろうか？

→要約は文章全体を要約することだけでなく、要約する目的や必要に応じて、内容や分量、方法が異なることをおさえる。

→要約した内容が、基となる文章の内容と変わっていないか確かめる。自分の言葉で言い換えた場合は、伝えたいことが替わっていないか、情報が不足していないか推敲することができるようにする。

◇文脈に即し、正しい漢字を書くことができるようにする。

・漢字を正しく用いる態度と習慣が身に付いているだろうか？

→他教科の学習や日常的な文章のやり取りでも意識して漢字を使うよう意識付ける。機械的な書き取り練習だけでなく、字体、字形、音訓、意味や用法などの知識を得ること、必要に応じて辞書(デジタル辞書を含む)を活用することを習慣付けていく。

→タブレット端末の変換機能を生かし、同音異義語、同訓異字にも着目して、文脈に合わせて使い分けができるようにする。

◇自分の考えが伝わる文章になるよう工夫する力を付ける。

・自分の考えが伝わるよう、表現の効果を考えて描写しているだろうか？

→自分が伝えたいことは何かを明確にし、効果を考えながら工夫して記述したり、伝えたいことが読み手に伝わっているかを確かめて推敲したりすることができるようにする。

取手市立小学校 算数の結果

成果がみられたところ

◎加法や減法の問題場面の数量の関係を捉え、式に表す力
（数と計算　知識・技能）

◎円グラフの特徴を理解し、割合を読み取る力
（データの活用　知識・技能）

課題となったところ

▲異種の二つの量の割合として捉えられる数量の関係について考察する力　（変化と関係　思考・判断・表現）

→「道のりと時間と速さ」
道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断したり、その理由を言葉や数を用いて説明したりすることができていない。

▲図形を構成する要素やそれらの位置関係に着目し、立体図形について考察する力　（図形　思考・判断・表現）

→「球の直径と立方体の体積」
図形を構成する要素の中から、問題解決に必要な要素を正しく選択し活用することができていない。

今後の学校教育の中で

◇<u>速さの意味についての理解を深め、場面に応じて速さの比べ方を考察できるようにする。</u>

・速さの意味について理解しているか？
→道のりと時間の二つの数量関係に着目し、その関係を用いることで問題解決ができるようにする。

・場面に応じた速さの比べ方は身に付いているか？
→道のりが等しい場合やかかる時間が等しい場合について、日常の場面に置き換えたり、線分図で整理して考えたりして、比べ方を身に付けられるようにする。

◇<u>具体的な操作活動を通して、図形の意味や性質の理解を深めることで、必要な要素を見いだせるようにする。</u>

・具体的な操作活動を取り入れることを大切にする。
→図形を構成する要素を実際に測ったり、異なる図形どうしを並べて観察したりして、図形の意味や性質の理解を深める。

・必要な要素を見いだせるようにする。
→図形を構成する要素や図形どうしの関係に着目させ、筋道を立てて問題解決できるようにする。

取手市立中学校 数学の結果

成果がみられたところ

◎問題場面における考察の対象を明確に捉え、数学的に処理する力　（数と式　知識・技能）

◎グラフの傾きや交点の意味を事象に即して解釈する力　（関数　知識・技能）

課題となったところ

▲データの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する力

（データの活用　思考・判断・表現）

→「箱ひげ図の読み取り」
四分位範囲や箱ひげ図の必要性と意味の理解が不十分である。
四分位範囲や箱ひげ図を用いて分布の傾向を比較して読み取る力が身に付いていない。

▲筋道を立てて考え、証明する力　（図形　思考・判断・表現）

→「数学的表現を使った証明」
仮定から結論を導く推論の過程を数学的に表現する力が身に付いていない。

今後の学校教育の中で

◇<u>表やグラフ、図の作成が目標にならないように、傾向を読み取り、説明する活動を重視する。</u>

・用語や意味を正しく理解できているか？
→データの分布の傾向を読み取り、互いに伝え合う活動に取り組むことで、数学的表現を正しく活用できるようにする。

・傾向を読み取るための視点は身に付いているか？
→判断の根拠となるものを説明し合う活動を通して、どの部分に着目すれば、傾向を読み取れるのかという視点を身に付けられるようにする。

◇<u>事柄が成り立つことについて、方針を立て、それに基づいて証明することができるようにする。</u>

・方針を立ててから証明をかいているか？
→仮定から結論まで、何を、どんな性質を根拠に、どのような順序で説明していくのかという証明の方針を確認する活動を取り入れる。
「あと何が分かれば合同と言える？」
「そこが等しいことはどうすれば説明できる？」

取手市立小中学校 児童生徒質問紙調査の結果

小学校児童質問紙の結果から

〇朝食を摂取し、同じ時間に起床する児童の割合が高く、全国・県と比較しても同じぐらいの割合です。

〇「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と感じる児童の割合が昨年度より高く、全国・県と比較すると同じぐらいの割合です。

▲「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」と感じる児童の割合が低く、全国・県と比較しても同じぐらいの割合です。

▲「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と感じる児童の割合が、全国・県と比較すると低いです。

中学校児童質問紙の結果から

〇同じ時間に就寝したり起床したりする生徒の割合が高く、全国・県と比較しても同じぐらいの割合です。

〇「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と感じる生徒の割合が児童同様に昨年度より高く、全国・県と比較すると同じぐらいの割合です。

▲「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」と感じる生徒の割合が低く、全国・県と比較しても同じぐらいの割合です。

▲「将来の夢や目標を持っている」と感じている生徒の割合が低く、全国・県と比較しても低いです。

今後の学校教育の中で

「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」と感じる児童生徒の割合が低いことから、複数の教員が様々な児童生徒をみる学校づくりを推進します。また、児童生徒が相談しやすい境づくりとして、教職員一人一人が児童生徒の気持ちに寄り添い、学校全体でチームとしての援助を行う体制の充実を図ることで、信頼関係の構築を推進していきます。

児童生徒の生活習慣と学力の関係

このような子供ほど、正答率が高い傾向にあります

※小中学生ともに同様の傾向が見られます。

〇基本的な生活習慣が確立している児童生徒（朝食を毎日食べている。毎日、同じくらいの時刻に起きている・寝ている。）
〇自分には、よいところがあると思っている児童生徒
〇人が困っているときに、進んで助けている児童生徒
〇学校に行くのが楽しいと思っている児童生徒
〇スマートホンやタブレットで、ゲームをしたり、SNSや動画を見たりしている時間が少ない児童生徒
〇分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫している児童生徒
〇自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝えられるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している児童生徒
〇友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる児童生徒

今後の学校教育の中で

「朝食を毎日食べている」「スマートホンやゲーム機器の使用時間の厳守」など、基本的な生活習慣の定着を図ったり、「人が困っているときに進んで助ける」「ボランティア活動に参加する」などの様々な体験等を通じて、自己肯定感が高まったり、他者や地域の役に立とうと思う心や態度を養ったりすることが、広い意味で学力の向上につながると考えます。学校教育の中では、一人一人の子どもを主語とした学びへの転換を図るとともに、探究的な学びの充実やICTの効果的な活用などによる豊かな学びの展開を主軸とした、すべての子どもの可能性を引き出す活力ある学校づくりを進めてまいります。